

手をかけてあげると、貝は応えてくれる

愛情込めて育て上げる真珠

波が穏やかな美しい海で育てられる真珠。世界中の人を魅了してやまない、その光り輝く宝石は、真つ黒に日焼けしながら、貝に日々愛情を注ぎ続ける海の男によって育まれています。

取材・文／岸田直子 撮影／原田圭介

第39回
全国真珠品評会
(浜揚げ珠)
農林水産大臣賞
受賞

全国真珠品評会は、全国真珠養殖漁業協同組合連合会と一般社団法人日本真珠振興会の共催で行われます。この品評会では、指定期間中に同一区域内の100貝を出品、各地区で選抜された中から、品質面、商品珠出現率の優れたものが入賞。最優秀賞に農林水産大臣賞が贈られます。



富高さんが育てた花珠。強い光沢を持つ最高級品。



有限会社富高真珠（大分県）
富高秀一さん・美穂さん

秀一さんは1969年生まれ。21歳のとき、父親が創業した富高真珠で働き始め、2代目を継承。美穂さんは1968年生まれ。1993年に秀一さんと結婚。以来、5月から11月の繁忙期は作業を手伝い、夫を支えている。所在地／大分県津久見市網代

人の手をかけてこそ
生まれる海の宝石

自然光の下でも、内側から光を放つような深い輝き。かすかにクリム色がかかった直径8mmの真珠は、美しい光沢に富んでいます。

「真珠層に厚みがあって、ガチガチに巻いている。これが『花珠』です」と教えてくれるのは富高真珠の富高秀一さん。

花珠とは、真珠の品質を評価する「巻き・光沢・キズ・色・形」のすべてにおいて最も優れたもので、めったに採ることができないと言われている希少な真珠のこと。「こういう、いい珠が出たときが一番うれい」と目を細めます。

真珠は、貝の持つ自然の力から生まれる宝石ですが、優れた真珠を養殖するには、さまざまな工程でこまやかな手間をかけなければなりません。人の力があって初めて、美しい真珠が生まれるのです。

いい真珠の養成は健康な母貝育成から

真珠の養殖は母貝になるアコヤ貝の育成から始まります。稚貝を籠に並べて海中に入れ、貝の成長に合わせて籠を替え、貝掃除、貝殻の寄生虫駆除などの手入れをしながら、1年半ほどかけて育てます。富高真珠の場合は、その数12万〜13万個。その後、真珠のもとになる「核」を挿入するための処理を施し、10万個に核を挿入。穏やかな内湾で養生させたあと、沖合の漁場で飼育（本養殖）します。「真珠の出来は、挿核までで8〜9割が決まる、と僕は思う。健康な母貝を育ててあげれば、あとは貝がどんどん自分の力で、いい珠を育ててくれます」とはいえ、1年半から2年かけて養殖し、真珠の収穫作業である「浜揚げ」ができるものは65%ほど。養殖期間中に貝が死んだり、珠になつていないものがあるからです。そのため、貝のまま出品し、審査の際に貝を開いて中の真珠を取り出して、品質面と商品珠出現率（商品になる珠がどれくらいあるか）を選考する全国真珠品評会（浜揚げ珠）は、養殖業者の真の実力が問われると言われています。

富高さんは昨年、この品評会（第39回）で最優秀賞である農林



津久見湾の穏やかな内湾に面した作業所。海底が見えるほど海は透き通って美しい。



籠に入れた母貝をイカダから吊るして育成する。



沖合にある養殖場。浮き玉イカダの下にいくつもの籠が吊るされている。

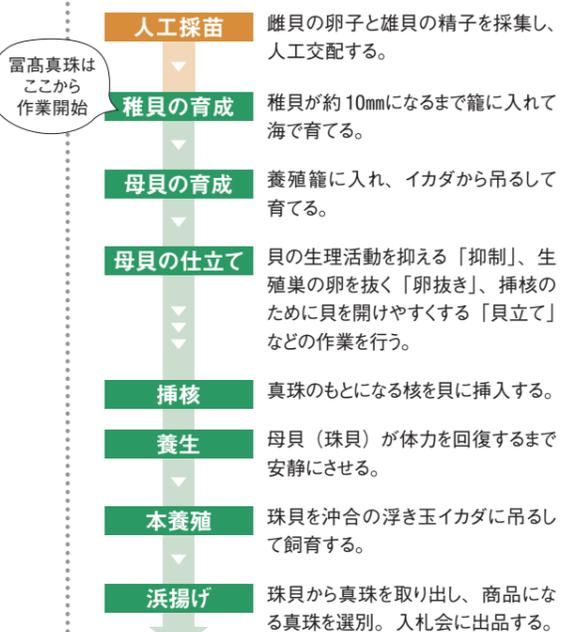


真珠を体内に抱えた珠貝（たまがい）たち。この珠貝はことしの12月に浜揚げされるもの。

オレンジ色の卵を抜いて、挿核する。



アコヤ真珠養殖の流れ



毎日、貝と真剣に向かい合う

「赤ちゃん（稚貝）のときから、毎日貝と真剣に向き合ってます。育てている珠が出来るかどうかわからない、いい珠が出てくるかどうかわからない、おこがましいけれど」

もともと漁師だった父親が、大分県佐伯市で始めた真珠養殖。富高さんが手伝うようになったのは21歳のときでした。貝の大量死というトラブルに見舞われ、津久見市への漁場移転を経て、貝と向かい合うこと26年。その間に美穂さ

んと結婚し、2人の女の子にも恵まれました。作業が忙しくなる5月から11月までは家族と数人の従業員で働きますが、それ以外の期間は富高さん一人。台風と明けのときを除けば、作業しない日はありません。「手をかけてあげると、貝は応えてくれる。手をかけすぎてもよくないけれど」「広々とした環境で育てると、いい真珠が育つ」。富高さんの言葉は、まるで子育てを語っているよう。真つ黒に日焼けした顔をくしゃくしゃにして「いやいや」と照れながらも、海の男は「魂込めて育ててます」ときっぱり。そのまなざしは、真珠に注ぐ慈愛に満ちあふれています。